

〔学 会〕

東京女子医科大学学会第180回例会抄録

日時 昭和48年1月26日(金)

場所 東京女子医科大学本部講堂

1. 感染症における起炎菌と薬剤感性検査の現況について

(中検細菌部)

長田 富香・○大橋節子・渡辺 節子
小林伸太郎・井上美恵子

中検細菌部における細菌培養検査件数は年々増加の一途をたどり、これに伴って薬剤感性検査件数も1961年当時年間1265件であったものが、1971年度には5568件と著しい増加を示している。

感染症にあつては、各種の臨床材料から病原菌と思われるものを分離培養し、これに対しディスク法により10数種の抗生剤に対する感性度を測定し、卍の感受性を示す薬剤の中で副作用の少ない、感染局所に移行しやすい薬剤により治療が行なわれるが、実際には患者の状態、感染菌の菌力、薬剤の菌に対する作用の仕方、更に菌の耐性化、菌交代現象なども加わり、治癒への道は必ずしも容易であるとは限らない。

われわれは最近3カ月間の各種臨床材料からの、起炎菌の分離状況と薬剤感性検査の結果を、材料別、菌種別に集計した結果、尿、膿、咽頭粘液、喀痰、胆汁、糞便、腔分泌液などの材料から、原因菌として分離された菌の分離頻度と、それらの菌の各種抗生物質に対する抗菌スペクトルから、感染症の治療に対する抗生物質の選択基準について検討したので報告した。

2. 細胞内蛍光色素注入法による網膜細胞の同定

(第1生理) 橋本 葉子

近年蛍光色素(Procion Yellow M4RS)を微小電極に充填し、この電極を網膜内細胞に刺入して電位を記録し、細胞の性質を調べると同時に、電気泳動的に色素を細胞内に注入してこれを組織学的に検索する方法がKanekoにより開発され、網膜以外の組織でも広く応用されつつある。われわれはKanekoの方法を改良して亀の網膜に応用し、主としてS電位の発生細胞の同定を行

なつた。Procion Yellowを注入した細胞の切線断および横断切片を作り検討した結果、L型S細胞は太い樹枝状突起が優勢である水平細胞であり、C型S細胞は細い樹枝状突起が主となっている水平細胞であることが明らかとなつた。これはGlutaraldehyde-Osmium固定、Toluidin blue染色による網膜組織標本で確認した。しかし両細胞の樹枝状突起領域の大きさは殆ど同じである。また水平細胞以外の細胞の染出しも試みた。以上はYale University School of Medicine, Department of Ophthalmology and Visual Scienceにおいて、W.H. Miller, T. Saito and T. Tomitaとの共同研究によるものである。

3. 小児の頭蓋内血管異常にみられるクモ膜下出血について

(脳神経外科)

○篠原 豊明・松森 邦昭・井沢 正博
加川 瑞夫・別府 俊男・喜多村孝一

小児においてもクモ膜下出血は稀ではない。小児のクモ膜下出血の原因には、1) 頭部外傷、2) 頭蓋内血管異常、3) 頭蓋内腫瘍、4) 若年性高血圧症、5) 白血病等の血液疾患、6) 中毒性、代謝性疾患、7) 薬物の副作用、等が挙げられるが、脳神経外科領域で比較的良好に経験されるクモ膜下出血は、外傷、頭蓋内血管異常、頭蓋内腫瘍等によるものである。われわれが現在までに、非外傷性クモ膜下出血で脳血管撮影により頭蓋内血管異常を指摘し得た症例は9例である。症例は男性5例、女性4例と両者に差はない。年齢は11カ月~13才で、11才~13才が6例と最も多い。疾患別にみると、脳動静脈奇形が5例と最も多く、次いで近年注目されてきた脳底部異常血管網症3例、および小児では稀な脳動脈瘤1例となっている。症状はクモ膜下出血による髄膜刺激症状、意識障害等を全例に認める。しかし、発症が突然のクモ膜下出血発作である者は4例、クモ膜下出血以

前に痙攣発作、片麻痺、頭痛、知覚異常等の症状が認められる者は5例となつている。特に脳底部異常血管網症の全例に何らかの前駆症状が認められる点、注目に値する。入院時の神経脱落症状は個々の疾患により、また異常血管の存在場所により異つている。これら9症例の内、脳動脈奇形の2例に根治手術が行なわれ、4例に持続脳室ドレナージが行なわれた。予後についてみると、入院時から意識障害が強く重篤な経過をとつた脳動脈瘤1例、および脳底部異常血管網症1例の計2例は死の転帰をとり、脳動脈奇形では予後が良好で全例生存している。以上の如く、幼小児の頭蓋内血管異常にみられるクモ膜下出血は、成人のそれとは起因疾患、症状、予後に差がみられ、その治療等も異つている。本学会では幼小児の頭蓋内血管異常によるクモ膜下出血の症例を中心に述べ、合わせて若干の文献的考察を試みた。

4. 当科における頭部外傷の統計的観察

(脳神経外科)

○大久保 正・河野 宏・高良 英一
氷室 博・橋本 卓雄・井沢 正博
篠原 豊明・河村 弘庸・窪田 惺
清水 隆・神保 実・喜多村孝一

当脳神経センター開設以来、当センターを訪れた患者総数は8823名で、そのうち頭部外傷総数は3165名であり、その38%に当たる。その内訳は、男性2095名、女性1070名で、男性対女性の比は約2:1である。そのうち入院を必要としたものは592名であり、頭部外傷総数の約19%に当る。脳振盪、頭蓋骨々折、外傷性クモ膜下出血等は449名であり、脳挫傷を主とした重症頭部外傷で手術適応にならなかつた例は59名で、頭部外傷総数の約1.9%に当たり、入院を必要としたものの約10%になる。頭蓋内血腫例は83名であり、頭部外傷総数の2.7%、入院したものの約14%を占める。頭蓋内血腫の内訳は、硬膜下血腫が30例で最も多く、硬膜外血腫25例がこれに次ぐ、その他硬膜外・硬膜下および脳内血腫を合併したものが28例である。頭蓋内血腫の年齢分布は、乳幼児期と壮年期に多発しており、乳幼児期では、男女比はほぼ同数であるのに対し、壮年期では、男性に圧倒的に多く、女性は極く稀れである。頭蓋内血腫全体としての男性対女性の比は4対1であり、男性に多い。血腫の部位は側頭部を中心としたテント上がほとんどであり、テント下はわずか4例にすぎない。予後については、硬膜外血腫が最も良く86%の救命率であり、有用な社会復帰をしている。これに反し硬膜下血腫、硬膜下血腫と脳内血腫、硬膜外血腫の合併したものは、死亡率が60%であ

り、救命しえても重篤な後遺症を残すことが多い。これらをかき救命するかは、年齢、受傷機転、部位、血腫部位など種々の要因があるが、そのうち最も重要な因子は、受傷より手術までの時間である。これをいかに短縮するかが、今後の救急医療体制の課題である。

5. 先天性風疹症候群の1症例

(眼科) ○白浜優美子・小暮美津子

先天性風疹症候群は、1941年、Greggが妊娠の初期に風疹に罹患した母親から先天性心疾患、眼奇形、難聴等の先天奇形を有する子供が生れることに気づき報告したのに始まる。

以来、各地で多数の報告がなされ、各種の症状が追加されたが、本邦眼科領域での風疹症候群の報告は十数例あるに過ぎない。

今回、私共は先天性心奇形、網膜症を有し、風疹抗体が母子ともに陽性の1症例を経験したので報告した。

なお、本邦における風疹網膜症の報告はまだ3例を数えるのみである。

6. 巨大膀胱憩室腫瘍の1例

(泌尿器科)

○益子 五月・梅津 隆子・吉田美喜子
河野 南雄・高橋 通子・増田 聡子
佐々木則子

われわれは、巨大膀胱憩室腫瘍の1例を経験しましたので報告する。症例は69才男子。約1年前から膿尿と圧痛を伴った左下腹部腫瘍に気づき、昭和47年3月10日当科受診。X線検査で尿道狭窄、膀胱左壁に陰影欠損を伴った巨大膀胱憩室を認めたため憩室腫瘍と診断し、昭和47年5月16日、左腎尿管全摘出術、憩室摘出術および腫瘍摘出術施行。腫瘍は組織学的に扁平上皮癌であつたため、外照射を行なつたが、術後65日目に死亡した。

7. 乳児の水腎症を合併したと思われる先天性片側性多発性嚢胞腎の1治療例

(外科)

○中野 達也・天野 一夫・岡 寿士
鈴木 忠・倉光 秀麿・織畑 秀夫

生後40日の男児。満期産で、生後も何らの症状も見られていなかったが、たまたま生後1カ月目の乳児検診の際、腹部腫瘍を指摘され、開腹、腎切除術を施行の結果、水腎症を合併した先天性片側性多発性嚢胞腎と判明した。

本症は、比較的稀な疾患であるので、若干の文献的考察を加えて報告した。

8. 医療ソーシャルワーカーの機能——中央リハビリ